戦前の暮らしから学ぶ未来の暮らし

～昔と今と未来の暮らしを考える～

90 歳ヒアリング落語のシナリオをみてみよう

目次

未来の暮らし方を育む泉の創造　2
44 の失われつつあるの暮らしの価値　3
落語で学ぶ未来の暮らし方　4
・夏休みの宿題　5
・島の大学　19
・コウノトリの日記　31
・おに　41

未来の暮らし方を育む泉の創造

持続可能な未来に向けて心豊かな暮らし方を実現するために、ライフスタイルデザイン手法を用いた様々な取り組みを実施しています。これからの未来にどんな環境制約を受けるのかを踏まえ未来の暮らし方をデザインするのです。環境制約がますます厳しくなる未来に向けて、我々はどのようなライフスタイルがデザインできるのでしょうか。未来のライフスタイルに、今のライフスタイルの延長線を辿っても、環境問題が益々悪化してしまうだけです。私たちはバックキャスト思考という考え方で未来のライフスタイルを描く必要があるのです。バックキャスト思考とはいったい何でしょう。それは、この先起こりうる将来の環境制約を踏まえた上で、未来のあるべき姿から今に向かって正しい方向で物事を考える思考法です。人間の欲をいったん手放し、未来から今どうするべきかを考え、その枠の中で楽しく心豊かに暮らすことを考えるのがライフスタイルデザイン手法なのです。

まず、今ほど資源がたくさん使えなかった昔の暮らしに着目して、９０歳前後の高齢者にヒアリングを行いました。これを９０歳ヒアリングと呼びます。昔の暮らしは今ほど技術が発達していませんでしたが、今のような環境問題を大きく引き起こすような暮らし方もありませんでした。今の便利な暮らしから考えると、昔の暮らしは不便な分、辛く苦しいものであったと想像しがちですが、便利ではなくても楽しかったという意見が大半を占めるのです。さらには、今より楽しかったという意見が多く聞こえてきました。どうやら、昔の暮らしには不便な中で暮らすための知恵や工夫がたくさんあり、それらの工夫や学びから得る達成感が楽しみを引き出し、心を豊かにしていたようです。

未来のライフスタイルをデザインするにあたり、環境制約が前提になりますが、苦しみながら我慢するようなことばかりで、まったく楽しいことがないような暮らしでは、考えただけでもうんざりしてしまいます。

９０歳ヒアリングで得た貴重なお話を一人でも多くの人に伝えて、楽しみながら未来の暮らしを考えることができるよう創作落語にしました。笑いながら多くの世代にわかりやすく伝えることができる 90 歳ヒアリング落語。90 歳ヒアリング落語が、環境問題や昔の暮らしの知恵に、「触れる」「考える」「見直す」ことのきっかけとなり、より多くの人に楽しんでいただき、持続可能な未来の暮らし方の創造に繋がることを期待しています。

４４の失われつつある暮らしの価値

まず、「４４の失われつつある暮らしの価値」について触れたいと思います。
今まで日本各地５００名を超える人々から聞き取り調査した９０歳ヒアリングデータを分析した結果、昔はあったけど今はなくなりつつある暮らし方の価値がみえてきました。
類似することがらをまとめて分類すると、44 の項目に集約されました。

テクノロジーが発達していない昔の暮らしを尋ねると、「今より不便でも楽しかった」という言葉を多くの高齢者から聞きました。今より不便でも心豊かに暮らしていたそうです。
この「４４の失われつつある暮らしの価値」が、心の豊かさを形成していたと考えられます。

44 Values

1. 自然に寄り添って暮らす
2. 自然を活かす知恵
3. 山、川、海から得る食材
4. 食の基本は自給自足
5. てまひまかけてつくる保存食
6. 質素な毎日の食事
7. ハレの日はごちそう
8. 野山で遊びほうける
9. 水を巧みに利用する
10. 燃料は近くの山や林から
11. 家の中心に火がある
12. 自然物に手をあわせる
13. 庭の木が暮らしを支える
14. 暮らしを映す家のかたち
15. 一年分を備蓄する
16. 何でも手づくりする
17. 直しながらていねいに使う
18. 最後の最後まで使う
19. 工夫を重ねる
20. 身近に生きものがいる
21. 暮らしの中に歌がある
22. 助け合うしくみ
23. 分け合う気持ち
24. つきあいの楽しみ
25. 人をもてなす
26. 出会いの場がある
27. 祭りと市の楽しみ
28. 行事を守る
29. 身近な生と死
30. 大ぜいで暮らす
31. 家族を思いやる
32. みんなが役割を持つ
33. 子どもも働く
34. ともに暮らしながら伝える
35. いくつもの生業を持つ
36. お金を介さないやりとり
37. 町と村のつながり
38. 小さな店、町場のにぎわい
39. 振り売り、量り売り
40. どこまでも歩く
41. ささやかな贅沢
42. ちょっといい話
43. ちょうどいいあんばい
44. 生かされて生きる

落語で学ぶ未来の暮らし方

　昔から多くの人に親しまれている落語。古典落語の世界には昔の暮らしを背景にした物語がたくさん出てきます。その物語における暮らしを考えてみてください。昔の暮らしは不便で苦しいものばかりだと感じるでしょうか。そうではありません。様々なことを楽しみながら生活していたことがよくわかります。落語のおはなしが実話であるかどうかということは問題ではなく、ここに楽しみの見つけ方のヒントがあるということが重要なのです。

古典落語に「遊山船」というおはなしがあります。このおはなしでは夕涼みの楽しみ方が描かれています。昔はエアコンがありませんでした。夏の暑さをしのぐため、夕方になると橋の上や風通しの良い涼しい場所にでて夕涼みをします。ただ、夕涼みをするだけではなく、そこで楽しみを作り出すのです。
元々の目的に止まらず会話での遊びや視点の違いによる楽しさを見つけ出します。

　屋形船を見る→家が流れてきた？（視点あそび）
　芸妓＝芸衆なら舞妓＝マー衆？（言葉あそび）

このように常識にとらわれない視点で、物事を捉えることで笑いが起き、さらに言葉のおもしろさという駄洒落を組み込むことで、心豊かな遊びが生まれているのです。言語というのは最大のコミュニケーションツールです。そこへ「無駄」の豊かさが加わります。ここでいう「無駄」は物質的な「モノ」の無駄ではありません。
　無駄口 ＝ 金銭や資源を使わない時間、頭脳の無駄な使用という意味です。
そうすることで、幸せな時間の共有がはかれるという構図です。ともに「無駄」な時間を過ごし、共有することの楽しさが遊びとなるわけです。

　また、落語自体にも心豊かな遊びの要素があります。
落語は扇子と手拭いだけで、様々なことがらを表現します。
扇子がお箸になり筆になり、手拭いが紙になる。
時には手拭いが焼き芋になることも。
落語の動作がジェスチャーゲームそのものですね。

これからこの創作落語をひもといて、
　　未来の暮らしを考えてみましょう。

【夏休みの宿題】　　作：桂三四郎

「隆弘！！あんた明日から学校ちゃうの？いつまでも夏休み気分でおったらあかんねんで」
「え～もう夏休み終わりなん？今年の夏休みちょっと短くないんかな。」
「そんなわけないやろ毎年同じ期間休みやねんから」
「えーでも今年はうるう年やからもう一日長いんちゃうの？」
「夏休みにうるう年関係ないの！！そんなことよりあんた夏休みの宿題ちゃんとやってんねやろな？」
「お母さん見くびってもらったら困るわ。夏休みの宿題っていうのはな夏休み中に少しづつやるもんやねんで、夏休み最後の日に慌ててやるものじゃないってこと僕わかってんねん。それをふまえて来年からちゃんとやるわ」
「来年からって今年は？」
「今年はもうあきらめよう」
「なんやの！？まだあんた夏休みの宿題まだ終わってないんかいな！！」
「終わってないんと違うねん。まだ始まってすらいないねん。」
「まったく手つけてへんのかいな！！あんたお母さんあれだけ毎日宿題やれ宿題やれ
最後の日に残ってたら大変やでいうてたやろ。あんた何言うたか覚えてる？
「今日の分はもうやった」って毎日いうてたやないの。
あんた夏休み中ようそんな嘘つき続けてたな！！」
「お母さん、そんな言いかたといて、大事な家族に嘘をつき続けた僕の辛さも
考えてくれんと」
「なにをいうてんのあんたは。ほんま口ばっかり達者になって、
口から先に生まれてきたような子やなあんたは
「それに関しては口から先に生んでしまったお母さんにも多少の責任があるからなあ」
「ええ加減にしいやあんた！！お父さんに怒ってもらうからな！！おとうさーん」

「なに～！？」
「ちょっと隆弘夏休みの宿題全くやってへんねんて！！
また今年も家族総出でこの子の宿題手伝わなあかんようなるで！！」
「え～？そんなんむりや！！この見積もりの書類今日中に書き上げて
提出せんかったらクライアントに何言われるかわからん！！」
「もう～お父さんもぎりぎりなん。お父さんもちょっと隆弘の宿題てつだって～」
「お母さん、これはうちの家系の遺伝やから仕方ないで。こうなったら発想を変えて
最後の一日を楽しもう」」

このお話は、2016 年 3 月 16 日に伊勢志摩で開催したシンポジウムにおいて上演された創作落語です。４世代で暮らす大家族を舞台に、夏休みの宿題である環境問題についての作文を書くため、子供がおじいさん、ひいおじいさんに昔の暮らしを聞くという物語です。30 代の両親、50 代のおじいさん、90 歳のひいおじいさん。それぞれの世代背景をうまく交え、暮らし方を表現しています。しかし今の子供にとってはどの時代も昔のはなし。おじいさんの時代の話とひいおじいさんの時代の話をごちゃごちゃにまぜながら、夏休みの作文が完成するというお話です。この創作落語では、そのような時代背景によって暮らし方の違いを楽しく比較することができます。あらためて、これからの未来の暮らし方について大切なことを気づかされるストーリーになっています。

口から先に生んでしまった
お母さんにも多少の責任があるからなあ

「えーでも今年はうるう年やから
もう一日長いんちゃうの？」

夏休みの宿題っていうのはな
夏休み最後の日に慌ててやるもの
じゃないってこと僕わかってんねん。
それをふまえて来年からちゃんとやるわ

思わず笑ってしまう子供らしい発言で、お母さんと展開する可愛い
ボケ・ツッコミのお笑いの世界が、楽しみを引き出しています。
普通に昔の話を聞くより、落語にすることで、笑える楽しい工夫が
随所にあるため、みんな、面白おかしく耳に入れることができますよね。

「ええかげんにし！！毎年やであんた！！ほんま今年もクリスマスプレゼントも
お年玉もなしやからね！！わかってるやろな」
「ええ、わかってますよ。毎年ご両親からの微々たるお年玉とクリスマスプレゼント
よりも夏の快適さを優先させているのです。」
「あんた、そんなん言うてまたおじいちゃんおばちゃんからもらうつもりやろ。
もううちはおじいちゃんおばあちゃんだけやなしに。
ひいおじいちゃんおばあちゃんも同居してる上に子供はあんた一人やから
甘やかされてるから、ほんまろくなもんにならへんわ」
「すいません（笑）」

「なにはにかんでんねん。そんなことよりあんた夏休みの宿題。
とりあえずもうドリルやらなんやらはお母さんが答え丸写しで全部かいといたるから」
「でもそんなん大人の字で書いたら、きれいすぎてばれてしまうやん」
「だからお母さん子供の字に見えるようにわざわざ左手で下手に書いてんねやんか。
言うとくけどこれも今年までやでお母さん毎年左手で書き続けたら、左手も結構
字がうまくなってきてんのよ。あんたは毎年の自由研究はよやってしまい」
「今年はな自由研究はないねん。そのかわりな先生から課題がでて作文を
書かなあかんねん」
「どんな作文？」
「社会の課題でな、『昔と今の暮らしとこれからの暮らしを考える』っていう
テーマやねん。」
「どういうこと？」
「あのな、なんかな未来は今のように資源を自由に使えなくなるかもしれないから。
昔の暮らしを調べて、エコとか環境問題についての考えを発表せなあかんねん」
「それはお母さん手伝われへんわ。自分で調べんと」
「うん、それだけは自分でやるわ。だからお母さんも教えて昔のこと」
「いや、昔って。お母さんまだ３０やで。昔も今もそんなかわらへんで」
「えー、むかしも今もかわらない」
「書いたらあかんよ。お母さんそんな昔のひと違うもん。昔のことなんかしらんわ〜。
それやったらうちはせっかくおじいちゃんおばあちゃん、ひいおじいちゃん
おばあちゃんと同居してんねんからみんなに話聞いてみいな」

ここでは、大家族の良さが現れています。
核家族が多くなった今の時代、普段の生活でおじいさん、おばあさん、
ひいおじいさん、ひいおばさんのお話を聞くことも少なくなってしまっています。

「うちはおじいちゃん
おばあちゃんだけやなしに。
ひいおじいちゃんおばあちゃんも
同居してるから・・・」

44 Values

30. 大ぜいで暮らす
31. 家族を思いやる

家族であっても、これだけ多世代の価値観が共存するところでは、
個人主体の考え方だけでは、暮らせません。
協調性、会話、表現、さまざまな面において、
多世代で暮らすことの意義を考えてみてください。

「社会の課題でな、
『昔と今の暮らしとこれからの
暮らしを考える』っていう
テーマやねん。」

環境問題を考えるきっかけを提起しています。
普段の生活では、節電やゴミの分別といった観点は身近でも、
昔の暮らしと今の暮らしを比較して考える機会はなかなかありません。

「ねえねえ、おじいちゃん」
「おう、たかひろどした？」
「またお酒飲んでんの？」
「まあ、おじいちゃんも 55 歳で銀行退職してから毎日が夏休みみたいなもんやからな」

「あのね、昔の話を聞かせてほしいねん」
「昔のはなし？どんなこと？」
「なんか衣食住とか仕事とか」
「ええよ～。むかしはよかったな～。」
「へ～、昔はよかったんや？」
「よかったで～、今ほど便利ではないけどな。日本が一番景気がよくてな、いわゆるバブル
いうやっちゃ～。おじいちゃん毎日タクシーで銀行いってたで。夜なんかなかなか
タクシーも捕まらんかってみんな一万円札ひらひらさせて福沢諭吉の顔を見せなタクシー
とまってくれへんかったもんや」

「へー、昔ってどんなあそびしてたん？」
「昔の遊びは、派手やったな！！土曜の夜なんか男はみんなベルサーチの服着てディスコに
いくねん。ほな女の子がボディコンいうセクシーな服着て踊ってんねん。
そこをおじいちゃんは指の間全部にシャンパングラスもって女の子に声かけに行くねん。」
「むかしの女の子はどんなんやったん？」
「若い女の子はボディコンにＴバックいうやつはいてディスコでフリフリのセンス持って
踊ってたんやで。そういう女の子と夜景のきれいなハーバービューのレストランに
いくのが楽しみやった。」

「へー。昔の食べ物とかは？」
「わしらの世代は、ティラミスとパンナコッタやな。これがめちゃくちゃ流行ってな。
美味しいとこやと行列できてはいらへんかったり買われへんかったりしたもんや」
「家はどんなんやったん？」
「そら、日本中どこの土地も値段上がってたから家建てたらものすごいお金かかったんや。
そのあとバブルはじけて土地のねだんが下がって、むかし家建てた人は大変やったやろな～」
「ねえねえ、最後に環境とかエコについて聞かせて」
「そんなん子供は気にせんでええ。そんなことより、もっぺんバブル時代をとりもどすこと
考えたらええねん。とにかく昔はよかった」

「おじいちゃんありがとう！！昔ってよかったんやね！！」

いわゆる、バブル世代。
戦後の経済成長がもたらした大量生産大量消費型社会の典型のたとえで、
ものが溢れ簡単に手に入ることで「もったいない」という概念が薄れてしまった
背景を描いています。

むかしは
よかったな〜

おじいさんの、「むかしはよかった」と言うことばは、
景気が良く、活気があったことを指しています。
戦後、経済の活性化に主眼を置いていたため、
環境問題は据え置かれていた傾向がある時代です。
地球温暖化や気候変動という言葉は、1970 年代に
科学者の間で注目されるようにはなりましたが、
まだまだ広く一般市民の中には大きな問題として
溶け込んでいなかった時代です。

ここでおじいさんが説明するのは、子どもの遊びでは
ありませんが、子どもの遊びも自然のなかでの遊びから
エネルギーを使う遊びに変わってきています。
テレビゲームも電気を消費します。
　8. 野山で遊びほうける
という価値は、今では随分減ってきました。

昔の遊びは
派手やったな！！
・・・

ティラミスと
パンナコッタやな。

どの時代にも食文化の変化はあったでしょう。
しかし時代とともに、食べものを「作る」
という営みが減り、徐々に「買う」割合が
増えていったのもこの時代でしょう。

全ての人の思考ではありませんが、
環境が劣化した原因が垣間見える発言が
気になりますよね。

そんなん子供は気にせんでええ。
そんなことより、もっぺんバブル時代を
とりもどすこと考えたらええねん。

「ねえねえ、ひいおじいちゃん。ひいおばあちゃん」
「おー、まさひこくん。どうしたの？」
「おじいさん。このこは雅彦と違いますよ。この子は義男」
「二人ともまた僕の名前忘れたん？僕の名前はジョージマイケル！！」
「おーそうやった。お前は隆弘やな」

「なんでいっつもそれでわかるん。それよりひいおじいちゃん。昔の話聞かせてほしいねん」
「おお～。ええぞ～。むかーし昔、あるところにおじいさんとおばあさんがおった」
「その昔話と違うねん。むかしの話、夏休みの宿題やねん」
「あーその昔か～。昔はよかったな～。ばあさん。」
「そうですね～。今ほど便利じゃなかったですけどね」
「やっぱり昔ってよかったんや！！」
「よかったの～。今みたいにものがたくさんある時代じゃなかったからのう、
みんなものを大切にしとった。」
「へー、家とかはどんなんやったん？」
「昔は、風呂も五右衛門風呂いうので、かまの下からまきをくべて火を焚いて沸かしたんや。
小さいころ男の子は斧でまきを割って、女の子は風呂を沸かす手伝いをしたもんやった。」

「そうですねえ、今みたいにトイレも水洗じゃなかったですからね。」
「それどころか昔は紙もそんなになかったからのう、お尻をふくときは木のへらでふ
いとったのう。すてたらもったいないから何べんもあらってつかうんじゃ」
「ウォシュレットなかったんや」
「ウォシュレットどころかトイレットペーパーの代わりに新聞紙をつかったりしたのう。
そしたらある人のお尻には新聞のインクがうつって「真珠湾攻撃」ってかかれてたそうじゃ」
「服はどんなんきてたの？」
「わしらが小さいころはまだ着物の人もちらほらおったのう。
今みたいにいろんな服がなかった。お父さんお母さんの着物を仕立て直して、
お兄ちゃんおねえちゃんのおさがりを着るのが当たり前での。それがきれんようになったら
赤ちゃんのおしめにしたり雑巾にしたり。簡単にものを捨てるということがなかった。」
「なんでそんなに物すてへんの？」
「物がなかったというのもあるが、昔の人は物に感謝の気持ちを持っていきとったんじゃな。
無駄なものというのはないんじゃ。
物に感謝して生きるということは命に感謝するということじゃ」
「へー、ご飯は何食べてたん？」
「戦争中なんかは米がなくてろくなもん食べれなんだな～」

むかしは
よかったな〜

ひいおじいさんの、「むかしはよかった」
と言うことばは、４４の失われつつある暮らしの
価値に相当する心の豊かさです。

今みたいにものが
たくさんある時代じゃ
なかったからのう、みんな
ものを大切にしとった。

トイレットペーパーの代わりに
新聞紙をつかったりしたのう。

お父さんお母さんの
着物を仕立て直して、
お兄ちゃんおねえちゃんの
おさがりを着るのが
当たり前での。

それがきれんようになったら
赤ちゃんのおしめにしたり
雑巾にしたり。
簡単にものを捨てるという
ことがなかった。

ものが少なかった時代はものを大事にしました。
これからの未来、使える資源が減っていく中
ものを大事にするという価値観は高まって
くるでしょう。

44 Values

16. 何でも手づくりする
17. 直しながらていねいに使う
18. 最後の最後まで使う

そして、大切なのはこの気持ちです。

昔の人は物に感謝の気持ちを
持っていきとったんじゃな。

44 Values

12. 自然物に手をあわせる

昔は子どもも役割をもって家族の営みに参加
していました。その中で色々と学びます。

小さいころ男の子は
斧でまきを割って、
女の子は風呂を沸かす
手伝いをしたもんやった。

44 Values

32. みんなが役割を持つ
33. 子どもも働く
34. ともに暮らしながら伝える

「米がなかったらパンたべてたん？」
「パンもなかったのう」
「ほんならケーキ食べてたの？？」
「マリーアントワネットみたいなこと言うのう。昔は芋ばっかり食べてたのう、
戦時中なんか特に満足に食べられんかった。」
「おやつはどうしてたん？」
「おやつはほれ、川におるザリガニを捕まえて茹でてくうたのう」
「ザリガニってたべれるの？どんなあじ？」
「ん～。強いて言うなら・・・。ザリガニのあじじゃなあ」
「ザリガニたべましたねえ、私はバナナが食べたかったですねえ。
バナナは高かったから代わりにカマキリを捕まえて食べましたねぇ」
「バナナの代わりがカマキリなん？」
「なんでも食べたのう、なんにもなかったけどお腹がすいたら山にいってビワの実や
アケビをとったり、川に行ってフナ釣りをしたり、今はそんなことせんでも物が
簡単にてにはいるじゃろ」
「うん、Amazon でなんでも手に入るよ」
「いや、アマゾンまでいかんでも手に入るじゃろ」
「そのアマゾンじゃないよ」
「ほかにも、ご近所通しで助け合ったもんじゃ。
たとえば醤油がなかったら借りに行ったりのう。逆に貸してあげたりもした。
最近はご近所さんとあんまり顔を合わすことはなくなったが、昔は水道がなかったから
みんな井戸に集まって洗いもんなんかをしながら交流したんじゃ。ほらよくいうじゃろ」
「サミットってこと？」
「ちょっとちがうのう、G7 というか洗いもんはじいよりも婆の仕事じゃからのう。
いまは便利になった代わりにそういう人と人のつながりが薄くなってきた。
生活は豊かになったかもしれんが、心の豊かさがなくなっとるような気がするのう。」
「へー、最後にエコについて聞かせて」
「そら、もう昔はようさんおった。犬も猫もイタチもおった」
「猫じゃなくてエコ、なんか自然環境とか。なんかな資源がなくなって電気とかガスとか
なくなったらどうするってこと」
「電気がなくなったらなくなったでええんじゃ。もともと人間は自然と共存しとった。
なかったらなかったなりの生き方がある。ないもんを取り合いしたらいかん。
一人ひとりがモノの大切さを意識して足りないものはみんなで助け合えばええんじゃ。
奪い合えば足らず分け合えば余るちゅうこっちゃな」
「うん。ひいおじいちゃんありがとう！！」

さきほどの若いおじいさんとは異なり、ひいおじいさんの時代は、まさに自然が遊び場であり、食を得る場でもありました。そして、贅沢な食事はぜず質素な食事で過ごしていました。健康のためには良いですけどね。

昔は芋ばっかり食べてたのう
おやつはほれ、川におるザリガニを
捕まえて茹でてくうたのう

44 Values

3. 山、川、海から得る食材
4. 食の基本は自給自足
6. 質素な毎日の食事

44 Values

1. 自然に寄り添って暮らす
2. 自然を活かす知恵
8. 野山で遊びほうける

お腹がすいたら山にいって
ビワの実やアケビをとったり、
川に行ってフナ釣りをしたり

子どもたちも自然を活用してくらしていました。そして、おやつを自然から採ることも子供の遊びの一つだったことがわかります。遊びが生きる知恵の実践の場でした。

ほかにも、ご近所通しで
助け合ったもんじゃ。
醤油がなかったら借りに
行ったりのう。

44 Values

22. 助け合うしくみ
23. 分け合う気持ち
24. つきあいの楽しみ
36. お金を介さないやりとり

今はコンビニや 24 時間ストアで、なんでも簡単にものが手に入ります。
また車で出かければお店にいくのも容易です。昔はそんな環境ではなかったため、ご近所同士の助け合いが必須でした。

昔は水道がなかったから
みんな井戸に集まって
洗いもんなんかをしながら
交流したんじゃ。

いまは便利になった代わりに
そういう人と人のつながりが薄くなってきた。
生活は豊かになったかもしれんが、
心の豊かさがなくなっとるような
気がするのう。

もともと人間は
自然と共存しとった。
なかったらなかったなりの生き方がある。
奪い合えば足らず分け合えば
余るちゅうこっちゃな。

助け合いがあるからこそご近所の付き合い、集いの場が成り立っていました。ともに生きることが当たり前でした。

「はーい静かにしろ～。
もう夏休みが終わって一週間立つぞ、はい。

ではこの時間は夏休みの宿題の「今と昔とこれからの暮らしを考える」という
作文を提出してもらった。

しずかにしろ！！山中くん。山中隆弘！！」

「ふぇい！！」

「おい、なにを寝てるんだ。お前はこの作文どうやって調べた？
インターネットで調べたのか？それとも図書館で調べたのか？」

「ぼくんちは、おじいちゃんもひいおじいちゃんもいるのでみんなに話をきいてかきました。」

「うん。インターネットで調べるのもいいが生の言葉を参考にするのが一番いいんだ。
しかしなお前の作文はちょっとおかしいぞ。お前お母さんいくつや？」

「30歳です。」

「おじいちゃんの年わかるか？」

「55歳よりは上です」

「ひいおじいちゃんは？」

「たぶん90歳くらいです。」

「だからか、みんなの昔が混ざっておかしなことになってるぞ。
ちょっとよみあげてみるぞ。」

「昔と今とこれからの暮らしを考える
5 年 2 組山中隆弘　大阪府大阪市北区南森町 2 丁目」

「まず、住所はかかんでええんや。文字数を稼ごうとするなよ。」

「ぼくのうちには、両親とおじいちゃんおばあちゃん、ひいおじいちゃん
ひいおばあちゃんが一緒に住んでるので、昔のくらしについてみんなに聞いてみました。
みんな口をそろえていうのは「昔はよかった」と言っていました。
家族のみんなはどうも今は幸せではないようです。
みんなに昔のはなしを聞いてまとめてみると昔はすごく複雑だったことがわかりました。
昔は今よりも物がたくさんなく、みんながモノを大事にしていたそうです。
暮らしも今ほど便利ではなく、お風呂なんかは薪で焚いてたそうです。」

「ここまではええんや。こっからおかしいねん。」

「男の子は薪わりを女の子はお風呂を沸かす手伝いをしながら仕事場には
毎日タクシーで行っていたそうです。」

「なんでいきなりタクシーがでてくるんや？」

「トイレも今のようにウォシュレットがなく、それどころかトイレットペーパーも
なかったのでひいおじいちゃんは木のヘラでお尻をふいたあと、
捨てるのがもったいないので洗ったあとにそのへらでティラミスをたべていたそうです。」

「そんな汚いことするか！！」
「ひいおばあちゃんは紙がもったいないので一万円札でお尻をふいていました。」

「そっちのほうがもったいないやろ」

「だからディスコで踊ってる女の人はティーバックのお尻に福沢諭吉の顔が映っていたそうです。そのＴバックをおしめにしてから雑巾にするため捨てることはなかったそうです」
「布が足らん、布が」

「昔は、とても景気がよかったそうですが食べるものが少なく、基本的に芋かザリガニをたべていたそうです。おやつはパンナコッタが大人気で、売り切れて食べれないときは、代わりにカマキリをたべていたそうです。」
「なんでカマキリが代わりになんねん。」

「昔の男の人はちらほらベルサーチの着物で井戸にいき、女の人とスポーツカーでハーバービューのレストランでフナを釣り、醤油を借りて帰ったそうです。」
「どういう状況やねん！！オマエおじいちゃんとひいおじいちゃんの話が混ざりすぎや！！」

「あー、みんな静かにしろ。たしかに山中の作文はまざっておかしなことになってる。でもな悪いことばっかりじゃないいいことも書いてるねん。いいか。」

「このように昔の人は物を大切にしました。物を大切にするということは人を大切にするということにつながります。昔はいまより人と人のつながりを大事にして助け合っていたそうです。だからおじいちゃんもおばあちゃんもひいおじいちゃんもひいおばあちゃんも「昔はよかった」といいます。でも僕はそうは思いません。
今は今の良さがあると思います。今の世の中の便利さに、昔の人のものを大切にする考え方や、モノや資源がなかったらなかったで自然と共存するという生き方をすればいいと思います。
お母さんは「昔も今もあんまりかわらへん」といっていました。
それは、たぶん昔も今も大事なことは変わっていないという意味だとおもいます。
僕はザリガニやカマキリは食べられないけど、ひとりひとりみんながモノを大切にして助け合って生きていけば、昔よりも今よりも未来はきっと素晴らしいものになると思います。」

「最後だけ素晴らしいねん。最後の文章はせんせいもちょっと考えさせられたな。
みんなも山中くんが言ってたように一人一人がモノを大事にすることでエコ、環境について意識していけるとおもう。えらいぞ。
宿題もきっちり全部提出してるしな。まあちょっと字が汚かったが、
山中はこの夏休みにいろんなことを感じたんやろうな。
さぞ充実した夏休みだったんだなあ？」

「いえ、それほどでもないです。毎日宿題やってただけでした。」

たしかに山中の作文はまざって
おかしなことになってる。

隆弘君は、昔の暮らしと今の技術や
サービスを混ぜた暮らしを語っています。
未来のライフスタイルをデザインする
ということは、隆弘君が面白おかしく
やっていますが、昔の暮らしと今の
技術を混ぜることではありません。

環境制約を受けていた時代に薪を使っていたとして、その同じ環境制約を受けて
タクシーに乗ることができなくなるので、違和感を感じるのです。
質素な生活で一万円札でお尻をふくのも同じです。
共通の環境制約を受けているのにおかしな関係にあるときに違和感を感じるのです。

物を大切にすると
いうことは
人を大切にするとい
うことにつながります。

もともとは、物は自然物から作られていました。
物は命を持っていました。
それを大切にすることは命を大切にすることです。
つまり、人を大切にすることと同じです。
物があふれていない時代には物を大事にし、
それが人を大事にすることにつながっていたのです。
今はそれが薄れています。

今は今の良さがあると思います。

昔を肯定して、今を全否定するのは、誤解です。今の世の中にも便利で地球環境を
破壊しないものもあります。よく本質を見て判断しなければなりません。
隆弘君はそれに気づいたのはすごいです。

たぶん昔も今も
大事なことは変わっていない
という意味だとおもいます。

人が求めるもの、人とのつながり、
楽しみ、自然などは昔も今も同じですが、
それを得るための方法や手段が異なります。
方法や手段を変えていけばいいのです。

【島の大学】作 : 桂三四郎

「先輩、お久しぶりです。」
「おお、田川久しぶりやな。」
「ついに来ちゃいましたよ沖永良部に。先輩が去年沖永良部島の大学に入学してから、
いっつも facebook で島の写真をアップしてたじゃないですか ? ずっと思ってたんです。
先輩なんか調子こいてるなって」
「だれが調子にこいてるねん」
「いやいや、その写真をみて、すごくうらやましいなあっていつも思ってたんですよ。
豊かな自然に囲まれた南国の地で大学生活をおくれるなんてすばらしいことだなって」
「まあな、沖永良部島は美しい自然に囲まれてるだけではなく、島の人たちみんなが温かい
素晴らしいところやからな」
「いやー、いいですよね。僕ね、普通の大学行くのなんか嫌だったんですよ。
みんなそうじゃないですか。毎日なんとなく大学に行って、なんとなくバイトして、
なんとなく就職して。なんとなく結婚して、なんとなくリストラされて、
みんななんとなく死んでるでしょ ?」
「おまえ一般のサラリーマンに怒られるぞ」
「このままだったらなんとなく人生が終わるような気がして。
やっぱり大学生活を意味のあるものにしたいと思ったんですよ」
「そうか、それやったらこの大学を選んだのは正解かもしれへんな。
普通の大学とはだいぶ違うからな。」「やっぱそうですよねー !!
いやー、楽しみですね !! 南国のリゾート地でバカンス感覚で
大学生活を謳歌できるなんて最高じゃないですか」
「え ? お前、リゾート感覚でこの島にこようとしてるんか ?」
「当たり前じゃないですか。熱い日差し !! 白い砂浜 !! リゾートにくる女の子 !!
クラブ遊びにひと夏のアバンチュール !!」
「やっぱりそうか !! 勘違いしてるな。沖永良部島はリゾート地ではないぞ。
女の子もそんなにこないし。自然以外の観光地もそないないしな。
基本的に遊ぶという島ではないねん。まあ日差しだけはお前が思ってるより熱いけどな」
「え !! 沖縄みたいなしまじゃないんですか !?」
「20 年前の沖縄の自然が残ってる島ではあるけど。沖縄とは全然ちがう。
美ら海水族館もなければ、首里城もないし国際通りもない」
「だましたなこのやろう !!!」
「だれがだましてんねん」

このお話は、2016 年 9 月 3 日に沖永良部島で開催されたシンポジウムで公演された創作落語です。鹿児島県の南、奄美群島の南西に位置する沖永良部島でヒアリングした内容を元に創作されたお話です。島にある大学に先輩が進学し、美しい島の様子を FACEBOOK にアップされた写真を見て、わくわくしていました。青い海に白い砂浜、真っ黒に日焼けした先輩。きっと、南の島でマリンスポーツを楽しみながら、リゾート地で遊びながら毎日楽しい大学生活を送っていると勝手に思い込み入学した田川君。大学生活をおおいに楽しもうと意気込んでやってきた南の島。しかし実際、この大学に進学してみると、想像とは違う教育が待っていました。実践するのは「自給自足」。地球環境制約を考えながらあるべき未来の暮らし方に移行して行く背景が、面白おかしく描かれています。

いやー、楽しみですね !!
南国のリゾート地でバカンス感覚で
大学生活を謳歌できるなんて
最高じゃないですか。

熱い日差し !! 白い砂浜 !!
リゾートにくる女の子 !!

確かに南の島というと、青い空、白い海、綺麗な熱帯魚にビーチ。
島外の人であれば、誰しもリゾートにもってこいのイメージを抱いているでしょう。

「だってそうじゃないですか！！いっつも facebook であんな楽しそうな写真のせて。
みんなでお酒飲みながら三線ひいたり、美味しそうなフルーツのせたり！！
完全にリゾート感満載だったじゃないですか。
いつのまにか真っ黒に日焼けしてたくましいさわやかおきのえらぼーいになってしまって。
あの色白の不潔感ただよう先輩が！！」

「だれが不潔感漂ってんねん。でもこの島も住んでみたらなかなかいい島やぞ。
自然の豊かさはお前の想像以上やし、島の人はみんな親切でやさしい。
本島から来たひとにあったらみんな挨拶してくれたり話しかけてくれたり。
島の人とすぐ仲良くなってしょっちゅう飲んで毎日が楽しいで」
「じゃあ、毎日が夏休みとおもっていいんですね？毎日酒飲んでさわいで」
「お前、何しに来たんや。言うとくけどこの大学は、やることめっちゃ多いねんぞ」
「そういや、ぼくなんの下調べもせずに入学決めてしまいましたけど、
何を学ぶ大学なんですか？」

「ようそんな雰囲気だけで大学決めたな。
あのな、いいか、この地球上では石油なんかの資源を毎日使い続けているが、
この化石燃料はもってあと１５年。２０３０年には石油資源が不足するといわれてるねん」
「どういうことですか？」
「簡単に言うと２０３０年ころには石油の値段が高騰して今のように車に乗れなくなったり。
それどころか電気も今のように自由に使えなくなるかもしれない。
つまりいまのような便利な生活は手に入らなくなるかもしれないねん」

「えーーーー！！じゃあ２０３０年には人類が滅亡するってことですか？」
「そこまでは言ってない！！だから、未来の生活はきっとエネルギーに頼らない生活が
必要になってくるはずだからこの学校では、沖永良部での昔ながらの文化、生活の中から、
資源の枯渇による厳しい制約の中で心の豊かさを得る生き方を学んで、
これからの未来の新しいライフスタイルを作っていける人材を育てるという大学なんや。
わかったか？」
「ま、簡単に例えていうと、昔話の桃太郎を参考にして未来の話であるスターウォーズを
創るってことですか？」
「いやちょっと違うねん。」

「具体的にはどんなこと学ぶんですか？」

さて、遊び気分満々の田川くん。大学生活はどうなるのでしょう。

本島から来たひとにあったら
みんな挨拶してくれたり
話しかけてくれたり

44 Values

24. つきあいの楽しみ
25. 人をもてなす
37. 町と村のつながり

２０３０年には石油資源が
不足するといわれてるねん

石油の値段が高騰して
今のように車に乗れなくなったり。

それどころか電気も今のように
自由に使えなくなるかもしれない。

つまりいまのような便利な生活は
手に入らなくなるかもしれない

先輩から色々と環境制約について話をききました。
これから未来の暮らしには、以下の価値が必須になると言われました。

昔ながらの文化、生活の中から、
資源の枯渇による厳しい制約の中で
心の豊かさを得る生き方
これからの未来の新しいライフスタイル

44 Values

この、新しい暮らし方を創造するのにポイントになるのが、前述した 44 の価値なのです。

「まあ、沖永良部の歴史であったり、島独特な問題を考える。島のビジネスや政策を育む
ことにつながるカリキュラムがおもやねんけど。この大学は生活すべてが
授業みたいなもんやねん。」
「といいますと？」
「まずこの大学で５つの力を学ぶねん。食、自然、集い、楽しみ、仕事」
「食ってなんですか？」
「この豊かな自然を使っての自給自足やな。島の魚や、野菜、果物。
ヤギや豚の畜産だけでなく無農薬栽培への挑戦がはじまっているんや」
「えー！！自給自足！？自給自足って時給いくらですか？」
「わけのわからんこというな。それから自然との共存。できるだけエネルギー資源に
たよらない生活をする。たとえば、お風呂は薪で沸かす共同や」
「え！！毎日シャワーあびれないんですか！！岩盤浴できないんですか！！
サウナは！？ヨガは？」
「お前は丸の内のOLか。だいたい岩盤はどこにでもあるし、
サウナに入らんでも夏は自然と汗かくわ。」
「そんなん、プライバシーが守られないなんて絶対」
「ちなみに風呂は混浴やで」
「いやではないですけど。じゃあ、集いはなんなんですか？」
「島の人たちとの交流、そして自分たちで共同して冠婚葬祭から生活の場まで作り上げるんや」
「島の人たちとの交流は面白そうですね」
「その中で大変なんが三線やねん」
「それは大変ですね。ピッチャーゴロやったらダメなんでしょう？」
「野球の話と違うねん、三味線や。沖永良部の文化を学ぶ上で三線と踊りは欠かせへんねん。
男は三線女は踊りが必須科目なんや。というのも昔は集まりがあると必ず誰かが
三線をひいてみんな踊ってた。男も三線がうまい人間がもててたらしいわ」
「最後の一つはなんですか？」
「仕事や」
「仕事？」
「そう、農業、漁業、塩作り、運搬。
島の人たちが人手がひつようになったら手伝いにいくんや」
「時給いくらですか？」
「無償や」
「無償！！！？？ただ働き！！奴隷と同じじゃないですか！！」

まずこの大学で
５つの力を学ぶねん。
食、自然、集い、
楽しみ、仕事

この豊かな自然を使っての自給自足やな。
島の魚や、野菜、果物。ヤギや豚の畜産だけでなく
無農薬栽培への挑戦がはじまっているんや

それから自然との共存。
できるだけエネルギー資源に
たよらない生活をする。

お風呂は薪で沸かす共同や

島の人たちとの交流、
そして自分たちで共同して
冠婚葬祭から生活の場まで
作り上げるんや

44 Values

1. 自然に寄り添って暮らす
2. 自然を活かす知恵
3. 山、川、海から得る食材
4. 食の基本は自給自足

三味線や。沖永良部の文化を学ぶ上で
三線と踊りは欠かせへんねん。
というのも昔は集まりがあると
必ず誰かが三線をひいてみんな踊ってた。
男も三線がうまい人間がもててたらしいわ

44 Values

21. 暮らしの中に歌がある
24. つきあいの楽しみ
27. 祭りと市の楽しみ
28. 行事を守る

仕事。農業、漁業、塩作り、運搬。
島の人たちが人手がひつように
なったら手伝いにいくんや

90 歳ヒアリングで昔の暮らしを尋ねると、このような状況が聞き取れました。
４４の失われつつある暮らしの価値のうちのいくつかが含まれています。

「奴隷とちゃうわ！！
向こうが困っているときに助けてあげる代わりにこっちがなにかしたいときには
協力してくれる。人と人の助け合い、人と人とがつながっていけば資源に頼らなくても
心豊かな暮らしができることを楽しみながら学ぶのがこの大学や」
「ちょっと待ってくださいよ。ぼくが思い描いてた大学生活と全然違うじゃないですか。
サークルとかはないんですか？」
「サークルはないけど、部活はあるぞ」
「何部ですか？」
「沖永良部や」
「なにする部活ですか？」
「自給自足や」
「やることいっしょじゃないですか！！合コンとかないんですか！？」
「あるよ、みんなで三線引いておどる」
「やること一緒じゃないですか！！就活とかどうするんですか？」
「秋になったら忙しくなるぞ。」
「それ就活じゃなくて収穫じゃないですか！！！やること一緒じゃないですか！！」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「いや、先輩。もうじき卒業ですね。」
「そうやな。なんやかんやでお前も大学３回生。あれだけ嫌がってた島暮らしもすっかり
気に入って全然地元に帰らへんかったやないか」
「いや、最初の一年は何かあるたんびに地元に帰ろうとおもったんですよ。
でも帰ろうとすると台風が近づいて飛行機が欠航になって。
そのたんびに村の人の家に集まって黒糖焼酎で酒盛りして。
帰ろうまた台風で欠航になって酒盛りして。
へたしたらこの島に毎週、台風来てるでしょ。
毎回そんなことになってたら帰る気なくなってしまいましたよ」
「しかし、お前が入学して３年。世間もだいぶ変わってきたな」
「そうですね、原油とか地下資源の高騰が思ってたより早く進んで、
飛行機の値段も高くなっただけじゃなく。
前みたいに車も自由にのれなくなってしまいましたもんね。
まさか吉幾三の「はー、テレビもねえ、ラジオもねえ、車もそれほど走ってねえ」
これが現実になるとは思いませんでした。」

向こうが困っているときに助けてあげる
代わりにこっちがなにかしたいときには
協力してくれる。人と人の助け合い、
人と人とがつながっていけば資源に頼らなくても
心豊かな暮らしができる

助け合う仕組みは、どんどん減っています。
なんでもお金を払えば提供される時代です。
人との繋がりが希薄になってしまっていると
感じている高齢者の方もたくさんいます。

44 Values

22. 助け合うしくみ
24. つきあいの楽しみ
36. お金を介さないやりとり

さあ、そんなドタバタな大学生活も次第に慣れていった田川くん。
成長したのでしょうか。

あれだけ嫌がってた島暮らしもすっかり
気に入って全然地元に帰らへんかったやないか

どうやら島の暮らしも慣れて、気に入ったご様子です。ここは落語のお話ですので、
少し先の未来を想定した物語になっていますが、実際、地球温暖化の影響と思われる
自然の変化は今でもすでに出始めています。

これから、ガソリンが高騰し、飛行機も車も今のままのものは利用できない時代が
くるでしょう。
もちろん、全てがなくなるわけではないでしょう。新しい技術の置き換えで、
今までと変わりない機能が使える機器も新たにでてくると思われます。
しかし、まだ見えない未来の技術の出現可能性の期待に頼ってばかりでは
いけません。なくても楽しく過ごせる「心豊かになる技」が私たちにも必要です。

「そうやなあ。資源がなくなったことでこの島の暮らしが見直され移住する人も年々ふえてきてるしな。どこにいても資源がないなら、大自然に囲まれて、人とのつながりが深い心豊かなこの島の暮らしにあこがれる人が多くなったんやろうな」
「そうですね。この島は自給自足だけでなく太陽エネルギーや、風力発電で自足型エネルギーシステムも充実してるから電気も満足に使えますし、先輩がしてたみたいに SNS にこの島の生活の様子をＵＰしたらみんなすごくうらやましがるんですよ。」
「世間のものの価値観が変わってきたんやろな。資源やエネルギーに頼らないで心豊かな生活をすることがかっこいいという価値観にかわってきたんや。でもエネルギーを使えることが魅力やと思ってる人間はこの沖永良部の魅力をわかってないとおもうな」
「そうですね、ここでの生活は考え方を変えてくれましたよ。最初は不便だ不便だと文句ばっかり言ってましたけど。しだいしだいに足りないものを何で補うか、どうやって制約の中から楽しみをみつけだすか。島のお年寄りの皆さんに話を聞いて自分たちで昔の生活の中から新しいことを考えるのがどんどん楽しくなってきましたね。」
「そやな、自分にできること、できないことがみつかって自然やものに感謝の気持ちをもつようになってくるよな。でも大学にきたのかサバイバル生活に来たのかわからんようになった時もあったな。」
「一番びっくりしたのは、正月も昔のしきたりを学ぶっていいうて目の前で豚をさばいてるのを見たとき女の子なんか号泣してましたもんね。豚がぎゃんぎゃん泣いてる声が耳に残って。なんて正月やとおもいました。ただ人間なれるというのは恐ろしいもので、去年号泣してた女の子が豚の血で野菜煮込んだ「血汁」をお代わりしてましたからね。それどころかその女の子次の年には豚のぎゃんぎゃんなく声きいたら条件反射でよだれ出てましたよ。」
「女の子も変わっていくよな。最初はバリバリ化粧してた女の子も化粧っ気がなくなって。でも毎日体動かして、島の人とふれあって毎日笑顔でいるからどんどん魅力的になるよな。」
「女の子の価値観も変わってきて。昔の島みたいに彼氏の条件が三線のうまいひとになってますもんね。」
「そうや、女子寮の前で夜好きなおんなのこ呼ぶのに電話やメールじゃなく三線で呼ぶのがおシャレやと思われるようになって。みんな女子寮の前で覚えたての三線ひくねんけど、あまりに下手やったら女の子が出てこずに寮母さんがでてきて『もうちょっと練習してからおいで』言われて恥かくねん」
「でも例外もありましたよ。僕の同級生で三線下手やけどめっちゃ男前なやつと、めっちゃ三線がうまいブタゴリラみたいなやついるんですけど。

この島の暮らしが見直され移住する人も
年々ふえてきてるしな。

大自然に囲まれて、人とのつながりが深い
心豊かなこの島の暮らしにあこがれる人が
多くなったんやろうな

都会の自給率はとても低いです。
都会の人はそこだけでは
生きて行くことができません。
しかし、地方には豊かな自然、
田畑がたくさんあり、野菜や
果物を自分で育てて
頂くことも可能です。

でもエネルギーを使えることが魅力やと
思ってる人間はこの沖永良部の魅力を
わかってないとおもうな

ものの考え方や見方が違うことにより、
価値あるものが価値無いものに
なってしまうことがあります。
エネルギーが使えない島では
自動車の音は聞こえません。
静かな空間が広がります。
エネルギー社会では見えなくなる価値があります。個人主義を追求すると、
人とのつながりを楽しめません。そのことに彼らは気づいたのです。

世間のものの価値観が変わってきたんやろな。
資源やエネルギーに頼らないで
心豊かな生活をすることがかっこいい
という価値観にかわってきたんや。

近年、そういう暮らしに憧れる
若い人が増え、またものの価値観
も変わりつつあります。
シンプルで何もないのが美しい
という価値も増えて来ています。
徐々にかわりつつあると
言えるでしょう。

正月も昔のしきたりを学ぶっていいうて
目の前で豚をさばいてるのを見たとき
女の子なんか号泣してましたもんね。

44 Values

4. 食の基本は自給自足
20. 身近に生きものがいる
29. 身近な生と死
34. ともに暮らしながら伝える

豚を殺して食べるとなると抵抗がありますが、
普段、人々が口にしている肉はおなじように
どこかで誰かが殺しているわけです。
見えないところで、精肉されているので、
気にせず口にしますが、昔の人はこのように全て
自分たちでつくりました。ですので、無駄にできないこともよく理解できたはずです。
感謝の気持ち、大切にする気持ちが薄れるのは、やはりお金で簡単に手に入るように
なったから、気持ちの在りかが変わってしまったのかもしれません。

その時は下手な三線が聞こえたら「男前が来てる！！」って女の子が出てくるんですけど。
上手な三線が聞こえたら「この三線はブタゴリラや」って誰も出てこないって
ことがあったんです」
「三線の音でだれかわかるからな」
「そこでブタゴリラも考えて、わざと三線を下手に弾いたんです。
そしたら女の子は男前が来てると思って出てくるでしょ。夜に真っ暗の中で
だれかわからん中女の子とブタゴリラが流れ星を見に行ったんです。
満点の星空の中女の子がふっと横をみると男前だと思ってたら横にいるのが
月明かりに照らされたブタゴリラだったんですって」
「それロマンチックなんか怪談なんかようわからんはなしやな。」
「その男前も、三線がうまくなってしまってこのやり方はもう使えないんです。
ブタゴリラは相変わらずあのうまいですけど。」
「お前はどうなんや？」
「それが、なんやかんやで三線下手なの僕だけで。。。今まで何べんも夜に女子寮前で
三線引いたんですけど寮母のおばあちゃんしか出てこないんです。
好きな女の子を誘いたいんですけどどうやっても三線が下手なんです。
たぶんこのままだと卒業までだれも一緒に流れ星を見に行ってくれないですよ。
なんかいい方法ないですか？」
「そういうことはもっと早く言えよ。それやったら山の先生に頼めよ」
「山の先生？あのおじいさんですか？」
「そや、あのおじいさん。三線の名人で若いころは島で一番の人気者やったらしいで。
あのおじいさんの三線の音聞いたら女の人はみんな踊りながら家からでてくるほどらしいで、
黒糖焼酎１本もってったら快く引き受けてくれるわ。
面白そうやからそれがうまくいくか俺も様子見に行くわ」

「先輩、じゃあそこで見えないように隠れててくださいね。じゃ、先生よろしくお願いします」
（三線の演奏）
「先輩、聞こえてますか？やっぱり島一番の三線の名人ですね。なかなかきかせますよ。
一応好みの子にはそれとなく行くこと伝えてますんで。。。あ、出てきましたよ！！！
暗くてよく見えませんけど、近づいてきた。あれ！？あれ！？先輩！！
あれ寮母のおばあさんが踊りながらでてきましたよ！！話がちがいますよ！！
先輩なんでですか？」

「おそらくあの寮母さん。山の先生の恋人や。」

44 Values

20. 身近に生きものがいる

【コウノトリの日記】
作：桂三四郎

「幸助、幸助！！」
「はい、鳥長！！およびですか？」
「おう、お前を呼び出したのはほかでもないんや。
わしがコウノトリの鳥長になってずいぶん経つ。わしもだいぶと年いってきた」
「そうですね、しばらくみん間に頭真っ白になってしまいましたもんね」
「それはもとからや、コウノトリはみんな頭は白いねん。」
「あーそうでした、そうでした。しばらく見ない間に尾っぽの羽が真っ白になったんですね」
「いや、尾っぽもももともと白いねん」
「あー、そうなんですか。おもしろいですねえ」

「しょうもないこと言わんでええねん。わしも羽の黒い部分が白髪交じりになってきた。
いつなにがあるかわからん。そこでそろそろ次期鳥長であるお前に
伝えておかないかんことがあるんや」
「伝えないかんこと？なんですか？」
「それはな、われわれコウノトリが普段生活している。この豊岡の「コウノトリの郷」に
なぜ我々がいるのかという歴史とこれからの課題や」
「そういや、今までぼーっと暮らしてきましたけど。そんなこと考えたことなかったですね。
歴史ってなんですか？」
「じつはな、我々は実は「日本人」とちがうんや」
「もともと人ではないんちゃいます」
「せやせや、わしらはもともと日本の鳥ではないんや」
「どういうことですか？」
「とおい昔は、わしらコウノトリは珍しい鳥ではなかったらしい。どこにでもおったそうや。
それが戦後からどんどんわしらの住処やった湿地帯が日本から少なくなったうえに、
農薬をたくさんつかうようになったせいでそれまで田んぼに住んでたカエルや
どじょうといったわしらの餌になってた動物がどんどん少なくなって１９７０年代に
日本のコウノトリは絶滅してしもたんや」
「え！！絶滅！？でも現にぼくら日本のコウノトリがこうしているじゃないですか。」
「それは日本の人間たちがよその国からもらい受けたコウノトリを何とか繁殖させてそれを
野生に返しているその返されたコウノトリ我々や」
「え？そうなんですか？じゃあ僕たちも人間に育てられて自然に放されたってことですか？
そんな記憶全然ないですよ。」

このお話は、2016 年 10 月 29 日に豊岡市において開催したシンポジウムで上演された、コウノトリを題材にした創作落語です。豊岡ではコウノトリの野生復帰を目指すために、様々な取り組みを行い、自然環境を改善してきました。昔、コウノトリはたくさん飛んでいました。日本各地で見た目の美しい農産物をより多く生産しようと、農薬が大量に使われるようになりました。人間にはさほど影響がない薬品であっても、小さい生物には大きな影響がありました。田んぼや畑、周辺の水辺に住む生物が生きれなくなり、姿を消したのです。この小さい生き物を餌にしていたコウノトリは餌場を無くし、同じく豊岡の地から姿を消しました。そこで減農薬栽培に移し、生き物たちを復帰させ、昔のようにコウノトリが住める地域をつくる努力をしました。そのお話を落語にしています。

とおい昔は、わしらコウノトリは
珍しい鳥ではなかったらしい。
どこにでもおったそうや。

それが戦後からどんどんわしらの住処やった
湿地帯が日本から少なくなったうえに、
農薬をたくさんつかうようになったせいで

それまで田んぼに住んでたカエルや
どじょうといったわしらの餌になってた
動物がどんどん少なくなって１９７０年代に
日本のコウノトリは絶滅してしもたんや

「お前の放鳥式のときはな。野に放された 10 分後に餌食べに帰ってきたんや。
でも覚えてないやろなぁ。鳥はすぐもの忘れるからなあ・・・。鳥頭言うくらいや」
「それ、鶏だけじゃなかったんですね。」
「何をいうてんねん。鶏ほど忘れるかいな。あいつらはほんまに忘れやからな。
３歩あるいたら自分が鶏であることすら忘れてんねんから。
捕まってさばかれて、粉付けられてフライドチキンにされた時にやっと
自分が鶏やったことおもいだすんや」
「それ、誰に聞いたんですか？フライドチキンと喋ったことあるんですか？」
「誰に聞いたかはもう忘れた」
「都合のいい物忘れですね」
「でもお前も人間にそだてられて放鳥された記憶はのこってないやろ？」
「はいというか、過去はふり返らないタイプなんで」
「かっこええ言い方すな、わしらコウノトリの記憶はもって３日や。それが証拠に
３日前何食うたか思い出してみ？」
「えーと、たしかサムゲタン？」
「食えるか！！だいたいコウノトリが鶏くうなよ。それにわしらコウノトリはモノ食べるとき
丸のみにするねんで。サムゲタンみたいな熱いもん丸のみにしたら長いのど通って
胃におちるまで『あついあついあついあつい』なってたいへんやないか。」
「でも鳥長はなんで昔のこととか覚えてるんですか？おかしいじゃないですか同じ
コウノトリやのになんでですか？」
「わしも毎日忘れてる。でもな、わしは鳥長になってから毎日日記をつけてるんや。」
「え、日記つけてるんですか？」
「そうや、まず朝起きたら鳥長になってから昨日までの日記を全部よんで思い出してから
一日が始まるねん。」
「それものすごく大変ですね！！」
「大変やぞ～。もしうっかり昼過ぎに起きてもうたら、読んでるうちに暗くなってもて
字が読まれへんなるねん」
「僕らみんな鳥目ですからね。」
「そう、だから鳥長になってからというもの毎日が地獄やったんや。
しかもこういう大事な話をするときは歴代鳥長の日記も読み返さなあかんから、
わしもう２日寝んと日記読み返していまここにいるねん。」
「たいへんですね。じゃあ、僕が次期鳥長になるということは今日から毎日
日記を書かないかんということですか？」
「そうや、だからお前には今から言うことを後世に語り継いでもらいたいんや。」
「わかりました。で、なんの話してましたっけ？」

日本の空から姿を消したコウノトリ。豊岡市ではコウノトリの住める町をつくろうと様々な取り組みを行って来ました。その中のひとつ、コウノトリ育む農法。
絶滅危惧種生物のコウノトリが餌にするドジョウなどの生物を、湿地や田んぼに復活させるため、減農薬の農法に取り組んでいます。
コウノトリだけでなく、その他の絶滅危惧種のヒメシロアサザや、在来種のオオアカウキクサなどの水生生物も生息している地域です。
これらの生物が生息する円山川下流域・周辺水田は、平成 24 年 7 月にラムサール条約湿地に登録されました。今では 100 羽を超えるコウノトリが羽ばたいています。

昔、コウノトリがまだたくさんいた頃、人々は様々な生き物と共生していました。

「もう忘れたんかいな。わしらが外国からの帰国子女やということや」
「えらいええいい方しますね。だいたいどこの国なんですか？」
「ソ連という国らしい」
「ソ連？どこですかそこの国？」
「わしもどこにあるかわからんねん。世界地図にも載ってないねん。
こないだ北国の年いった渡り鳥にソ連のこと聞いたら『ソ連のことは恐ロシア』
とかわけわからんこというてたわ。それからこの豊岡で人工飼育が始まったんや。
この豊岡ではコウノトリの住む素晴らしい町づくりをコンセプトに、人工飼育を
推し進めてある県庁の職員さんが熱心に育ててくれたおかげで豊岡で第一号の
コウノトリが誕生し、それが初代の鳥長になってその職員さんはのちに市長になったんや。」
「鳥長と市長になったって超すごいですね！！」
「ややこしい言い方すな。それ以来すこしずつコウノトリの数もふえてきた。
この豊岡の町もコウノトリのためにも、そして豊かな自然を守るためにも農薬を抑えて
作物を作ったりして人間とコウノトリの共存を実現していこうとしてるんや」
「へー、確かにたんぼに僕らがいると人間がにこにこしてますもんね。」
「そうや、我々コウノトリは幸運を運んでくると言われているんや、
それにわしらが田んぼで足をこうして踏みならしてるのを人間はわしらが舞をまっている
「コウノトリの舞」というてそこでできた米が「コウノトリの米」や」
「え？ぼくらが舞を舞うからコウノトリの米で舞舞う前は何米やったんですか？」
「お前はややこしい言い方すな。それじぶんで言うてて意味わかってんのか？
とにかく人間のほうが歩み寄ってくれてるんやこの機会に共存できるようにわしらも
努力していかないかん」
「そうですか、人間ってそこら中にいますけどなんか怖いなあ。」
「それは知ろうとせんから怖いんや、昔は人間の子供とよう遊んだもんや。
人間の子供が上げる凧いうおもちゃの周りをぐるぐるまわったら子供がよろこんでな。
あんまりぐるぐる回ってるうちに凧の糸に首が巻き付いてもうちょっとで
死んでしまうところやったんや」
「へー、昔はなかよかったんですね。人間はほかにどんな遊びをするんですか？」
「今と昔では変わってしまったなあ。昔は自然が遊び場で勉強のばでもあった。
魚を取ってその場でさばいて食べたり。子供らだけでハマグリを取りに行ったり。
ただ、ひとつだけわからんのが、玄武岩言うのを抱えてな、川底を歩くいう謎の遊びが
あったんや。あいつら、わしらより首短いのに、ようあんなとこ歩くわな。
遊び方を上の子供が下の子供に教えてみんな仲良く集まって暮らす集団生活のあり方も
自然と勉強になってたんや。」

44 Values

1. 自然に寄り添って暮らす
12. 自然物に手をあわせる
20. 身近に生きものがいる
42. ちょっといい話

コウノトリのためにも、
そして豊かな自然を守るためにも
農薬を抑えて作物を作ったりして
人間とコウノトリの共存を
実現していこうとしてるんや

それにわしらが田んぼで
足をこうして踏みならしてるのを
人間はわしらが舞をまっている
「コウノトリの舞」というて
そこでできた米が
「コウノトリの米」や

コウノトリ育む農法で作られたお米は「コウノトリ育む米」として
ブランド化され人気が出ています。無農薬・減農薬という農法は、
コウノトリだけでなく我々人間にも大切なポイントです。
自然と寄り添って暮らす中にも、このようにビジネスは当然成り立ちます。
他にもこのように環境に優しい持続可能なビジネスモデルの可能性が
まだまだ潜んでいるはずです。

昔は自然が遊び場で勉強のばでもあった。
魚を取ってその場でさばいて食べたり。
子供らだけでハマグリを取りに行ったり。

どこの地域でも、
自然が遊びの場であり、
学びの場でした。

ただ、ひとつだけわからんのが、
玄武岩言うのを抱えてな、
川底を歩くいう謎の遊びが
あったんや。

玄武岩の川底渡りは、90 歳ヒアリングで出て来た遊びです。
危険なので真似はできませんが、昔の子どもは危険を回避する力があったのでしょう。

「へー、でもどうでもいいけど。人間ってなんでも食べるんですね。僕らのことも
食べたりしませんかね？」
「まあ、今の時代はないやろう。
特にここらへんはくくひ神社でコウノトリは霊鳥として祭られてるくらいや。
でもうわさによると一羽だけ食べられたことあるらしい」

「え！！　なんで一羽だけなんですか？」
「食べてから気づいたんやって。あんまり美味しくないということに。」
「失礼な話ですね！！　食べられる側の気持ちになったらきれいに食べられたいですよね？」
「わしは食べられたくないけどな」
「そらそうですけど。でも逆に人間って食べたらおいしいんですか？」
「美味しいらしいで。人間の血をすするのはほんまにたまらんて蚊が言うとったわ。
たまに熊が人食うたら味覚えおるやろ。きっとうまいにちがいない」
「そうなんやー、いつか食べてみたいなー人間」
「共存言うてんのに食べてどないすんねん。
しかし昔に比べて今の子供は外で遊ばんようになった。
このままやと我々コウノトリと人間の距離はあいていく一方や。
昔の鳥長の日記によるとな、初めのうちは最近の気候の変化や環境の変化に気づいて、
豊岡よりも松の木の多い、餌場の多いより住みやすいところを探してた。
ところが少しずつ人間も考え方が変わってきた。
この地球上で人間は石油なんかの資源を毎日使い続けているが、
この化石燃料はもってあと１５年。２０３０年には石油資源が不足するといわれてる」
「どういうことですか？」
「簡単に言うと２０３０年ころには石油の値段が高騰して今のように車に乗れなくなったり。
それどころか電気も今のように自由に使えなくなるかもしれない。
つまりいまのような便利な生活は手に入らなくなるかもしれないねん」
「えーーーー！！じゃあ２０３０年には人類が滅亡するってことですか？」
「そこまでは言ってない！！
だから、未来の生活はきっとエネルギーに頼らない生活が必要になってくるはずや。
そこでこの豊岡でも、昔ながらの文化、生活の中から、資源の不足による厳しい制約の中で
心の豊かさを得る生き方を学んで、これからの未来の新しいライフスタイルを考えていく
という取り組みが始まっているんや。

豊岡市は放鳥するだけじゃなく、コウノトリが巣を作れるように松の木を植える
取り組みをしたり。餌である小動物を減らさないために農薬をできるだけ
使わなくしたりと、努力してくれてる。だからわれわれもこの豊岡を中心に
生きていこうと決めたんや。持ちつ持たれつや。
子供たちが昔の暮らしの良さからこれからのライフスタイルを見出してくれることで、
わしらコウノトリと本当の意味での共存が始まるんや」
「別にぼくらがおらんでも豊岡は生きていけるでしょう」
「いやいや、この豊岡近郊は昔スキーいう遊びが流行ったときに民宿やらホテルなんかで
めちゃくちゃ栄えてたんや。でもそれが下火になってしまってな。
昔ほどとはいわんでも少しでも豊岡が元気になるように環境産業を助けてやりたいんや。
そうすることで豊岡も盛り上がるしコウノトリの地位ももっと向上して、
あいつらを見返してやるんや」

コウノトリと人間の距離は
あいていく一方や。

未来の生活はきっと
エネルギーに頼らない生活が
必要になってくるはずや。

地下資源に頼る生活を続けていくことで、自然と人間との距離は、開いていく一方です。物理的に距離が離れているだけではなく、霊鳥、遊び相手、自然の知恵を活かすなどという、暮らしとの関わりが消えていこうとしています。電気を使って遊び、自動車を使って旅行に行くなど二酸化炭素をより多く排出する暮らしになっていったため、自然資源から人が離れていきました。

しかし地下資源はこのまま使い続けると枯渇してしまいます。そのためにも、地下資源、エネルギーに頼らない生活は必要です。薪などの自然資源は大いに重要になるでしょう。

自然との共生の本質は、
持ちつもたれつの概念です。

餌である小動物を減らさないために
農薬をできるだけ使わなくしたり ...
持ちつ持たれつや。

「別にぼくらがおらんでも豊岡は
生きていけるでしょう」

44 Values

1. 自然に寄り添って暮らす
2. 自然を活かす知恵
10. 燃料は近くの山や林から
22. 助け合うしくみ

ここでは、コウノトリは観光産業の活性化を手助けしたいと表現されていますが、もちろんコウノトリがブランド化を担っている部分はおおきいでしょう。
それに加え、自然界の生物多様性という側面から考えても、循環という観点は学ぶことが多いはずです。人同士だけでなく、自然界とも助け合う仕組みが重要です。

「あいつらって誰ですか？」

「誰ですかって、決まってるやないか。
わしらの永遠のライバル「鶴」や」
「あー鶴ですか」
「そうや、むかしは鶴もわしらコウノトリも明確な区別はなかったんやところが
１３０年前に鳥類学会でわしらのことを鶴ではないと区別しおったんや。
それからというものわしらコウノトリはその鶴ではないというコンプレックスに
苦しめられるんや。」

「そうやったんですか、ぼくらはもともとつるだったんですね」
「そうや、わしが一番くやしいのはな、「松上の鶴」や、松の木の上に止まってる
鳥はつるじゃなくて、ほんまはコウノトリやねん！！

コウノトリは松の上に卵産むやろ？
コウノトリやのに、あれは鶴や、鶴や言われて、まるでサギやがな！！
日本人が北方領土を返してほしいように、わしらはあの松の上を返してほしい！！」

「そう考えたら、腹立ってきましたね。ぼくらの権利を奪われたようなもんじゃないですか。
昔は一緒やったのに今では鶴だけ名鳥やとええふうに言われて。
「鶴のひとこえ」「掃き溜めに鶴」「鶴は千年、亀は万年」」
「そうや、ほかにも「白鶴」「JAL」「笑福亭鶴瓶」」
「鶴瓶さんはかんけいないでしょう」
「関係あるがな、笑福亭コウノトリ瓶やったらあそこまで売れてないやろ！！！

ほかにも「しょっつるなべ」に「つるとんたん」に「ツールドフランス」」
「もう鶴関係ないじゃないですか！！」

「わしらコウノトリが絶滅しかけたのも正直鶴のせいやと思ってるくらいや。
あいつらに裏切られたショックでわしらは絶滅しかけたんや」
「逆に鶴はこのことどない思ってるんでしょうね」
「ところが鶴はもうこのこと忘れとんねん」
「そこらはやっぱり鳥ですね！！」

「わしらももっとメジャーになるために色んなポジション争いをした。
お菓子になって人気の御みやげ物になろうとおもったら
先にハトがサブレになっとるねん。
わしらもサブレに！！っておもったけどわしら首が細いやろ？
サブレにしたら首がぽきぽき折れるんや、縁起悪いやろ。

医療関係はひよこが布亀の救急箱やっとるし、
荷物を運ぼうとおもったらさきにペリカンが手掛けてたんや」
「ほーほー」
「フクロウみたいな返事すな！！
そこでやっと定着したポジションが
「コウノトリが赤ちゃんを運んでくる」という言い伝えや。
これしかない！！　と、思った矢先に少子化の波がやってきたんや。
子供を運んでくるコウノトリが絶滅寸前で
少子化が進んでるなんてシャレにならへんがな。

だからお前は今日から毎日日記をつけて、このことを忘れず後世に語り継いでくれ！！」

「わかりました！！鳥長、いや先代！！お疲れ様でした！！」
「頼んだぞ。人間と仲良くしてくれよ。

はー、やっと日記をつけては読み返す毎日から解放される。」

「明日からどうやってくらすんですか？」

「明日からは、昔のことはなにもかも忘れて頭空っぽにして。アホウドリとしてくらすんや」

やっと日記をつけては
読み返す毎日から解放される。

日記をつける、というのは 90 歳ヒアリングで聞いた話です。昔の人は日記をつけて毎日の出来事を記憶に残そうとしました。
頭を使うことが長生きの秘訣かもしれません。

【おに】　　作：桂三四郎

「あ、ごめんなさい。僕、秘密基地にわすれものしたからとりにいってきてもいいですか？
先帰っててください。ぼくんち近所やからひとりでも帰れるから。
すいません。ほなねー。またした学校でー。」

あーあ、どんくさいな。秘密基地にアイパッド忘れてしもた。
よう考えたらそとで遊ぶのにアイパッドなんか持ってこんでよかったんや。
あれ？だれかおる。あ、それぼくのアイパッドやねんけど。。」
「あ！！あのごめんなさい。もうみんな帰ったと思って。
早く来てしまったら珍しいものがおいてあったから」
「珍しいもの？それアイパッドやで」
「アイパッド？へー。これがそうかそうですか。初めて触った。
インターネットとかいうのができるやつでしょう？」
「アイパッド知らんねや。北上の子でもみんなスマホとかもってるのに」
「北上の子って君ここの子じゃないんですか？」
「うん僕大阪から引っ越してきたばっかりやねん。君は北上の子やろ？」
「うんそうですよ。」
「でも、全然方言出えへんなあ。」
「ほうげん？」
「なんか話がかみ合わんなあ。きみどこの小学校なん？」
「ｓｙｏｕｇａｋｋｏｕ？」
「え？外人なん？」
「gaijinn ？」
「日本人ちゃうの？」
「ｎｉｈｏｎｎｊｉｎｎｔｙａｕｎｏ？」
「えー、ワタシコトバアナタワカラナイ？こっちがなまったらあかんがな。
話つうじんのかな？」
「ぼく日本人ちゃうよ」
「ことばわかんのかいな！！え？ほな韓国人？」

近年は子どもの安全を重視し様々なリスクを取り除いた結果、自然のなかでのびのび遊べる場も少なくなってしまいました。北上では「楽しみの自給」というテーマのもと、子どもの遊び場作りとして秘密基地プロジェクトを進めてきました。
2017 年 12 月 16 日に、北上市で開催したシンポジウムで上演した創作落語は、この「秘密基地」をテーマに作成。忘れ物を取りに来た人間の子どもが、鬼の子どもと出会ってしまうお話です。北上を始め、東北地方には昔から鬼にまつわる言い伝えがたくさんあります。その「鬼」が人間の子どもと会話しながら、間違った鬼のイメージを訂正したり、昔と今の違いを子どもに説明しながら現代の遊びと比較する流れで様々な会話を展開するストーリーです。鬼と人間の子どものコミカルな言葉遊びが絶妙で笑いを誘います。

よう考えたらそとで遊ぶのにアイパッドなんか持ってこんでよかったんや。

44 Values

1. 自然に寄り添って暮らす
2. 自然を活かす知恵
8. 野山で遊びほうける

北上に「秘密基地」が完成。
2017 年の初夏、お父さんたちが集まり、子どものための秘密基地を作りました。
小さな林の中にツリーハウスや竹の滑り台、ブランコ。そして親子で作ったテーブル。
今では楽しい空間です。ゲーム機で遊んでばかりだった子どもも、お父さんたちが一生懸命つくってくれた手作りアスレチックで、のびのびと遊ぶようになりました。
自然の中で危険を回避する能力を鍛えることも重要です。
そして、テレビゲームや iPad ではできない体幹を鍛えることができます。
人ととのコミュニケーションも増え、時には秘密基地で、バーベ Q も開催しています。

「ちがうよ」
「中国人？」
「ちがうよ」
「じゃあ何人？」
「ぼく人と違うよ。」
「人ちゃうの？じゃあ虫？」
「虫じゃないよ。ぼくは鬼です」
「は？」
「鬼」
「鬼？」
「鬼」
「鬼？」
「鬼」
「鬼？」
「いいかげん受け入れてもらえませんか？」
「だって、急に鬼やって言われても。見た目も僕と変わらへんし。めっちゃ普通やん」
「それが、人間の勝手な思い込みなんですよね。鬼ってどんなふうに思ってます？」
「え？急にそんなん言われても。あ、じゃあこのアイパッドで一般的な鬼について
調べてみるで。ほら一般的な鬼の画像ってこんな感じやで」
「こわ！！！！なんですかこの恐ろしい怪物！！」
「いや、これが鬼やんか。ほらネットで「鬼」って調べたら「一般的に頭に二本、
もしくわ一本の角が生えてて頭髪は細かく縮れ口には牙が生え指には鋭い爪があり、
虎の皮のこしぬのをつけていて、金棒をもった大男」って」
「それって人間の勝手に作り出したイメージですよ。頭に角なんか生えてても使い道
ないでしょ。別に携帯の電波がよくなるわけでもないし」
「頭髪は細かく縮れって」
「鬼だからってみんなパーマかかってるわけじゃないんですよ。僕なんかさらさらヘアですし」
「口には牙が生えって」
「八重歯なら生えてますけどね」
「指には鋭い爪が」
「うちのお母さんうるさいからすぐ切らされるんです」
「トラの皮のこしぬの」
「トラの皮ってユニクロで売ってないでしょ。」

北上に言い伝えられている鬼は、
怖い鬼ではなく、人々の守り神です。
鬼剣舞の鬼のお面も怖い顔をしていますが、
それは悪を追い払うためだそうです。

ほら一般的な鬼の画像ってこんな感じやで

44 Values

24. つきあいの楽しみ
27. 祭りと市の楽しみ
28. 行事を守る
34. ともに暮らしながら伝える

鬼剣舞など昔から伝承されている
文化が今も引き継がれています。
これらの文化を引き継ぐには、
地域の人の団結、協力が必ず必要です。
そこには集いがあり、人との付き合いがあるわけです。
そうして大切な昔からの文化が引き継がれていきます。

「鬼やのにユニクロ行くの！？」
「そりゃ行きますよ。ユニクロのダウン買ってますもん。
だいたい虎の腰巻いっちょうってそんなかっこで東北の冬は越せませんからね」
「金棒はもってないの？」
「僕サッカー部ですからね。野球部の人はもってますけど、」
「それ金属バットやん！！なんかぜんぜん僕らの思ってたんとちがうなあ」
「だから僕ら鬼はかなりイメージが悪いからどうしても人間と距離を置いてしまうんですよ。」
「えー、でもじゃあ赤鬼っておらへんの？」
「いますよ」
「え？赤鬼いるの？赤鬼はどんな鬼？」
「風呂上りの鬼です」
「それのぼせてるだけちゃうの？じゃあ青鬼は？」
「極度の冷え症」
「黄色の鬼は？」
「みかんの食べ過ぎ」
「黒い鬼は？」
「ハワイがえり」
「ハワイ帰り！！なんかイメージ狂うなあ。でも来年のこと言うと笑うんやろ？」
「来年のこと聞くたびわらってたら今年が終わってしまいますよ。
だいたいね人間は鬼を悪者にしすぎなんです。桃太郎だってそうでしょう？だいたい、
なぜ鬼だというだけで理由なく金銀財宝をうばわれるのですか？」
「だって鬼って悪いことをする種族って習ったよ」
「でも悪いかどうかは桃太郎基準でしょう？」
「え？まあ、そうかもね」
「鬼の側から見れば桃太郎は極悪な侵略者ですよ。
だから人間の遊びで鬼ごっこってあるでしょう？鬼たちはあの遊びを
「桃太郎ごっこ」といってます。」
「でも、こぶ取り爺さんだって怖い鬼出てくるやん」
「あれはタイトルおかしいでしょう？こぶを取ったのは鬼だから「こぶとり鬼」なのに
「こぶ取りじいさん」なら小太りなお爺さんみたいじゃないですか」
「そんなことあんまり考えたことないけど・・・。」
「それに、鬼の目にも涙、鬼のいぬまに洗濯、まず鬼が怖いという前提で作られた言葉ですし、
渡る世間は鬼ばかりって僕らにとってはただの日常ですよ」
「それは橋田寿賀子のドラマやんか。」

「赤鬼はどんな鬼？」
「風呂上りの鬼です」
「じゃあ青鬼は？」
「極度の冷え症」
「黄色の鬼は？」
「みかんの食べ過ぎ」
「黒い鬼は？」
「ハワイがえり」

ここにも落語ならではの
楽しい言葉遊びが組み込まれています。
上演後、北上の子供たちが
真似して遊んだそうです。
この創作落語が、こうやって
子どもの遊びに登場するのは
嬉しいものです。

「それに人間界で、鬼の使い方が雑になってるんです。」
「どういうこと？」
「たとえば、美味しいもの食べた時「これ鬼ウマですよ」とかいうでしょ。
あれどういう意味ですか？」
「いや、それは鬼のようにうまい」
「鬼のように美味いって、鬼食べたことありますか？」
「いや、ないけど。鬼忙しいとかいうやんか」
「それもおかしいですよね。鬼が忙しいのは２月３日の節分だけですよ。
だいたい「鬼は外福は内」って何なんですか？福を内に入れるのはわかりますよ。
だからってなぜ鬼を外に締め出すんですか？何も悪いことしてないのに
豆をぶつけられるってこんな屈辱ないですよ」
「たしかに」
「ほかにも鬼電って言いますけど鬼が電話してるとこ見たことあります？」
「いや、鬼自体見たことないもん。というか今のところ神経質な人間にしか見えてないよ。」
「人間はいったい僕らになんの恨みがあるんですか？鬼殺しいうお酒あるでしょ？
なんでそんなお酒がコンビニに売られてるんですか？」
なんか細かいこと気にしてんねんなあ。鬼ってもっと豪快な性格やとおもってたわ。」
「ほら、勝手にそう思い込んでるでしょ。鬼は豪快やって。
鬼の中にも豪快なのもいれば僕みたいなのもいるんですよ。」
「てか、君僕と背格好かわらんけど年はいくつなの？」
「今年で７６」
「７６！！めっちゃ年上やん！！」
「そうですよ、だから僕のことは鬼いさんとよんでいいですよ」
「お兄さんっていうかもうおじいさんくらいの年齢ですよ。鬼は成長が緩やかなんですね。

どおりで大人みたいなこと言うと思った。で、お兄さんはここで何してるの？」
「今からみんなで集まってここで遊ぶんですよ」
「遊ぶ？」
「そう、人間の子供は昼間に遊ぶけど、鬼の子供は夜に遊びだすんです。
だからお母さんに言われたでしょ。夜遅くまで起きてると鬼が来るぞ〜って、
あれは遅くまで起きてる子供は鬼だと思って僕らが誘いに行ったことからなんですよ」
「へー、昔は人間と遊んだんですか？」
「いえ、基本的に人間と接触することはないですね。人間の様子をうかがってはいますけど」
「へー、そうなんや。昔と比べてどうなん？」
「昔とだいぶ変わってきてしまいましたね。
今の子供はあんまり外で遊ばなくなってしまいましたから」
「へー、昔の子供は外で遊んだん？」
「そうですね、北上の子供たちはみんな北上川であそんでましたね」
「へー、泳いだりしたの？」
「それもありますけど冬になったら川に氷が流れてくるんですよ。
魚がそれをよけて岸側を通るからそこに網を張って魚を取ったりしてましたね。
ほかにも山で山菜を取ったりウサギを捕まえたりみんな外で遊んでましたよ」
「そうなんや。昔は自然であそんでたんやね。」
「でもこの頃の子供は外で遊ばなくなりました。
僕たち鬼は人間と自然が仲良くできてるか見守る守り神なんです。
この頃、人間と自然とのつながりが薄くなっているような気がします。」
「まあ、外で遊びたくても遊ぶところもないし、お母さんは危ないから一人で
外で遊ぶなって言うし。僕も川とかで遊びたいけど一人で遊んだって楽しくないしなー。」
「そう、自然と人間が離れて行ってるのは人と人とのつながりが
薄くなってきてるからなんです。
昔から北上は人と人のつながりを大切にしてきた地方でね。
厳しい冬を乗り越えるためにみんなで助けあってきた人と人との絆が強いところなんです。
昔の人の言い伝えをしっかり守って暮らしてきました。
僕たちはそおの姿をずーっと見てきたんです」
「だから北上は鬼の住む町って呼ばれてんの？」
「そう、自然と共存して、人と人のきずなが強いこの北上の人たちの暮らしを
見守っていこうと思って鬼たちもここに住んでいる。
北上の人たちも僕たち鬼を敬って鬼の館や鬼剣舞を大事に残してくれている。」

北上の子供たちはみんな
北上川であそんでましたね

44 Values

1. 自然に寄り添って暮らす
2. 自然を活かす知恵
8. 野山で遊びほうける

冬になったら川に氷が
流れてくるんですよ。
魚がそれをよけて岸側を通るから
そこに網を張って魚を
取ったりしてましたね。

山で山菜を取ったり
ウサギを捕まえたり
みんな外で遊んでましたよ

この頃、
人間と自然とのつながりが
薄くなっているような気がします。

44 Values

1. 自然に寄り添って暮らす
22. 助け合うしくみ
44. 生かされて生きる

昔から北上は人と人のつながりを
大切にしてきた地方でね。
厳しい冬を乗り越えるために
みんなで助けあってきた人と人との
絆が強いところなんです

北上の人たちも僕たち
鬼を敬って鬼の館や鬼剣舞を
大事に残してくれている。

44 Values

27. 祭りと市の楽しみ
34. ともに暮らしながら伝える

昔の人の言い伝えを
しっかり守って暮らしてきました。

「そうなんや。だから鬼は北上にずっと住み続けて見守ってくれてるんや」

「いま、世界中少しずつ自然と人間が離れていってるんです。
この地球上では石油なんかの資源を毎日使い続けていますが、
この化石燃料はもってあと１５年。
２０３０年には石油資源が不足するといわれてるんです」

「どういうこと？」

「簡単に言うと２０３０年ころには石油の値段が高騰して
今のように車に乗れなくなったり。
それどころか電気も今のように自由に使えなくなるますかもしれない。
つまりいまのような便利な生活は
手に入らなくなるかもしれないということですね」
「えーーーー！！じゃあ２０３０年には人類が滅亡するってことですか？」

「そこまでは言ってませんよ！！だから、未来の生活はきっとエネルギーに
頼らない生活が必要になってくるはず。そこで自然と共存して生きてきた
北上の人たちの暮らしの知恵を生かして未来の暮らし方を考え直してほしいんです。」

「つまり、昔話の浦島太郎を参考にして新しいスターウォーズを作るっていうこと？」
「微妙に違いますけど、とにかく昔は今のように便利じゃなかった。
便利じゃなかったけどそこには人と人とのつながりがあった。
そこを忘れないでほしいな」
「うんでも、この北上はこの秘密基地を作って子供の遊び場をふやしたり
今でも人と人とのつながりを大事にしてるから大丈夫やと思うよ。
ぼくもこれから自然と共存していけるように気を付けるわ。」
「僕もその姿をずっと覗いておくわ」
「それはちょっと怖いからやめて～。
じゃあそろそろ帰るわ。ばいばい鬼いさん」
「うん、ばいばい！！人！！」
「そういや名前言うてなかったな！！
まあええわ。
最後にアイパッドで一緒に写真とろ！！ほんじゃあね」

だから鬼は北上にずっと住み続けて
見守ってくれてるんや

いま、世界中少しずつ
自然と人間が離れていってるんです。

この地球上では石油なんかの資源を
毎日使い続けていますが、
２０３０年には石油資源が
不足するといわれてるんです

つまりいまのような便利な生活は
手に入らなくなるかも
しれないということですね

おにが子どもに環境制約を教えて
くれていますが、ここに書かれている以上の
まだまだたくさんの環境制約が出てくることが
予測されています。

えーーーー！！
じゃあ２０３０年には人類が
滅亡するってことですか？

そして 90 歳ヒアリング創作落語で
おなじみのセリフになりました。

未来の生活はきっとエネルギーに
頼らない生活が必要になってくるはず。
そこで自然と共存して生きてきた
北上の人たちの暮らしの知恵を
生かして未来の暮らし方を
考え直してほしいんです。

90 歳ヒアリングで得た、昔の暮らしの知恵。
これらは、私たちのこれからの新しい未来心豊かに過ごすヒントになるはずです。

「ただいま〜」
「ただいまちゃうで！！あんたはほんまに！！なんで秘密基地からみんなと
一緒に帰ってこうへんのよ！！！」
「いや、忘れもんしてん」
「わすれもん取りに帰ってくるのになんでそんな時間かかんねんな！！
どうせ遊んでたんやろ！！」
「ちがうってお母さん。実はここだけの話、鬼と話しててん」
「おに？」
「そう、鬼」
「あんた嘘つくんやったらもう少しまともな嘘つきや！！！」
「ほんまやて、その証拠に写真一緒に取ってん」
「この子のどこが鬼やの！！ユニクロのダウン来てるやないの！！」
「そら、虎の毛皮だけやったら東北の冬は越せへんやんか！！」
「角生えてへんやんか」
「そんな牛や鹿やないねんから」
「髪の毛さらさらやんか」
「鬼がもみんながみんな天然パーマとちゃうで」
「牙もはえてないやん」
「よくみてみ八重歯生えてるよ」

「金棒もってないやんか！！」
「この子サッカー部やねん」
「ええ加減にしいや！！！北上が鬼の住む町やからってそんな嘘ついて！！
この子いくつやの？」
「この鬼 76 歳やで」
「嘘つけ！！ぜんぜんおもろないわあんたの嘘！！
あのなお母さんなにも遊ぶなとはいうてないねんで！！
いっつもいっつもわけのわからん言い訳してることに怒ってんねん。
あんたがちゃんと約束守られへん大人にならんように心を鬼にして言うてんねんで」

「心を鬼に？あーそうか北上に来る前から鬼はそばにおったんや」

90 歳ヒアリング創作落語いかがでしたか。
昔の暮らしには地域ごとに色々な特徴があったことが、お分りいただけたと思います。今回は落語になった部分的なお話ですが、他にもたくさんの未来の暮らしのヒントがあります。昔の暮らしの話を、おじいさんやおばあさんに直接聞いたことがあるかもしれませんが、このように落語になっていると、同じ話であっても、なかなか面白いのではないでしょうか。一緒にいてもなかなか聞く機会のない話はたくさんあると思います。今回この落語に合わせて紹介できた失われつつある価値は半分程度ですが、この価値を暮らしの中に新たな形で取り入れていくことで心豊かになれるでしょう。

44 Values

1. 自然に寄り添って暮らす
2. 自然を活かす知恵
3. 山、川、海から得る食材
4. 食の基本は自給自足
6. 質素な毎日の食事
8. 野山で遊びほうける
10. 燃料は近くの山や林から
12. 自然物に手をあわせる
16. 何でも手づくりする
17. 直しながらていねいに使う
18. 最後の最後まで使う
19. 工夫を重ねる
20. 身近に生きものがいる
21. 暮らしの中に歌がある
22. 助け合うしくみ
23. 分け合う気持ち
24. つきあいの楽しみ
26. 出会いの場がある
27. 祭りと市の楽しみ
28. 行事を守る
29. 身近な生と死
30. 大ぜいで暮らす
31. 家族を思いやる
32. みんなが役割を持つ
33. 子どもも働く
34. ともに暮らしながら伝える
36. お金を介さないやりとり
37. 町と村のつながり
42. ちょっといい話
44. 生かされて生きる

昔の暮らしに触れることで忘れかけていた懐かしいことや、新たな昔の暮らしの知恵を知り、これからの未来の暮らし方を考えるきっかけになることを願っています。

未来の暮らし方を育む泉の創造

「未来の暮らし方を育む泉の創造」プロジェクトは、
国立研究開発法人科学技術振興機構 社会技術研究開発センター
「持続可能な多世代共創社会のデザイン」研究開発領域
平成 27 年度採択プロジェクトです。

未来の暮らし方を
育む泉の創造

平成 30 年 3 月 作成